

1980年代の日本における「マイコン」概念の多面性

Multifaceted Concept of *Maikon* during the 1980s in Japan

鈴木 真奈 SUZUKI Mana
 近畿大学 Kindai University
 suzuki.mana@gmail.com

Abstract To consider the spread of personal computers and other microcomputers, this paper describes how the term *Maikon*, an abbreviation of “microcomputer,” was used in the first half of the 1980s in Japan. Computer magazines such as Monthly *Maikon* (Microcomputer Magazine) from the National Diet Library and video content from the NHK Archives were investigated to clarify what *Maikon* referred to. This analysis uncovered two meanings. Firstly, *Maikon* referred to personal computers, which people at that time considered typical of microcomputers. Secondly, it referred to microcontrollers in consumer electronics, reflecting how computers became an indispensable part of our lives at that time. Furthermore, it should be noted that *Maikon* was understood as an abbreviation of “my computer.” Microcomputers enabled ownership of one’s own computer, which had previously been difficult. This usage to mean “my computer” therefore shows that microcomputers were for individual rather than professional use.

Key word : マイコンブーム, パーソナルコンピュータ, マイクロコンピュータ, マイコンピュータ

1. 問題設定と方法

1-1 マイクロコンピュータとマイコン

本論文では、1980年代の日本において、パーソナルコンピュータ・マイクロコンピュータの技術が一般的にどのような形で理解されていたかを、当時における「マイコン」という語の多義性に注目して検討する。主として、パソコンに関心を持つ層を対象とするマスメディアに着目して、語の用法を直接読み解く形を取ると共に、「マイコン」の解釈として存在した「マイコンピュータ」について明らかにする。

個人がコンピュータ（電子計算機）を所有できるようになるのは、1970年代半ばに、コンピュータのLSI化が進んだことにより、マイクロコンピュータが市場に登場するようになってからである。

マイクロコンピュータの「マイクロ」という表現は、ミニコンピュータと対比したものである。ミニコンピュータは、1965年にDEC社が発売したPDP-8がその始まりとされる。ミニコンピュータも、それまでのメインフレーム（汎用大型コンピュータ）よりも安価かつ小型化したコンピュータの意味で名付けられたものである。従って、マイクロコンピュータの元来の意味は、旧来のコンピュータよりも更に小さいコンピュータというものである。

マイクロコンピュータに関する主要な商品の発表は表-1にまとめた。起点となるのは、1971年にアメリカのインテル社が発売した、同社のi4004をCPUに持つMCS-4であ

る⁽¹⁾。その後、アメリカのAltair8800、日本のTK-80のように、個人でも購入可能な組み立て式のコンピュータが発売されるようになる。

アメリカでは1977年から、日本では1978年から、組立作業が不要である「パーソナルコンピュータ」「パソコン」が登場することになる⁽²⁾。1979年には日本電気からパーソナルコンピュータPC-8001が発売されているが、これはTK-80と開発を担当した部門が同じである。また同年よりマイクロコンピュータが組み込まれた家電製品が発売されるようになった。

1980年代前半の日本において、マイクロコンピュータという語は、パソコンなども包含する語として使用されることがあった。たとえば、文部省が1983年に出した通知「マイクロコンピュータの教育利用に関する調査について」では、「マイクロコンピュータとは、いわゆるパーソナルコンピュータ、ポケットコンピュータ、オフイスコンピュータ等の名称で呼ばれる、比較的簡易に利用される小型のコンピュータを指す」と定義している⁽³⁾。

マイクロコンピュータという語が、このようにあいまいかつ広範囲に使用された原因は、紛れもなくそれらを成立させている技術がごく短期間（パソコンが出現した1970年末から数年）で様々な形に発展したからに他ならない。文部省が挙げている例の他にも、家電製品や自動販売機といった一般に分かりやすい形でマイクロコンピュータの技術は生活の場に浸透していった。

表-1 マイクロコンピュータに関する出来事

年	出来事等 (日本国外での出来事は括弧に示す)
1971年	(アメリカのインテル社が4ビットマイクロプロセッサ i4004, マイクロコンピュータ MCS-4 を発表)
1974年	(アメリカのインテル社が8ビットマイクロプロセッサ i8800 を発表) (年末にアメリカの MITS 社が組み立て式コンピュータ Altair8800 を発表。CPU はインテル社の i8800 を採用した)
1976年	日本電気がマイクロコンピュータトレーニング用組み立てキット TK-80 を発表
1977年	(カナダのコモドル社が PET2001 を発表) (アメリカのアップル社が AppleII を発表) 『マイコン』誌の創刊
1978年	日立がベーシックマスターMB-6880 を発表 シャープが MZ-80K を発表
1979年	日本電気が PC-8001 を発表 松下電器産業が業界初となるマイコン制御の炊飯器 SR-6180FM を発表する

表-2 マイコンの三分類

「マイコン」の分類	用法	何の省略語か
組込型マイコン	組み立て式キットで供給されるマイクロコンピュータ 産業機械・家電製品に組み込まれた制御用コンピュータ	マイクロコンピュータ
PC型マイコン	パーソナルコンピュータ・パソコンの同義語	マイクロコンピュータ マイコンコンピュータ
個人型マイコン	(企業・官庁等が所有する大型コンピュータと対比して) 個人でも所有できる価格・大きさのコンピュータ	マイコンコンピュータ

マイクロコンピュータの普及を考える上でキーワードとなるのが「マイコン」という語である。これは「マイクロコンピュータ」の略語であるが、「マイコンコンピュータ」の略語であるという解釈も存在する。たとえば『現代用語の基礎知識』では、1988年から2000年まで、外来語・略語の項目に「マイコン」を my computer, microcomputer とし て掲載しており、意味は「自分のコンピュータ」「マイクロコンピュータの略」となっている⁽⁴⁾。

1-2 マイコンの三分類

ここで『現代用語の基礎知識』の記述をもう少し手がかりとしたい。「マイコン」に相当する項目が現れるのは1977年の「マイ・コン時代」によるが、この時には my computer であるという解釈がされている⁽⁵⁾。

翌1978年の「マイ・コン」の項目には、日本のマイ・コンはマイコンコンピュータ(自家用コンピュータ)の略語であり、英語ではパーソナル・コンピュータ(個人用コンピュータ)であるという解説が付け加えられ⁽⁶⁾、1979年になって以下のような記述が先頭に来るようになる。

マイ・コンというのは、日本的合成語で、マイクロコンピュータ(microcomputer 超小型コンピュータ)の略語で、日本ではこの他、マイ・コンコンピュータ(my computer 自家用コンピュータ)の意味でも使われている。この方は英語ではパーソナル・コンピュータ(個人用コンピュータ)といっている⁽⁷⁾。

この記述は、句読点や表現に微細な変更が加えられつつ、1984年まで採用されている。

1985年から1987年までは「マイ・コンピュータ」という意味のマイ・コンはパソコン(⇒別項)と称する⁽⁸⁾というように項目が分けられ、マイコンコンピュータとパーソナルコンピュータは同義と考えられていた。

以上のように、「マイコン」には三つの意味があると考えられていた。

- マイクロコンピュータの略称
- パーソナルコンピュータの別称
- マイコンコンピュータの略称

本論文では「マイコン」の語が頻出する。そのため、このような文脈の違いに応じて名称を与える。その分類を表-2にまとめた。

まず、組み立て式キットで発売された(パソコンのような完成品でない)マイクロコンピュータや、産業機械や家電製品などの電子機器に組み込まれる制御用コンピュータを指す文脈で「マイコン」が用いられる場合である。これを以下「組込型マイコン」と呼ぶ。また、「パーソナルコンピュータ」「パソコン」の同義語と見なせる文脈で使用されている場合を「PC型マイコン」と呼ぶ。さらに、「マイコンコンピュータ」の省略語として用いられている場合、特に個人で所有可能なコンピュータであることが強調されている場合を「個人型マイコン」と呼ぶ。

1-3 分析方法

本論文では雑誌資料と映像資料の両面から、「マイコン」の語の用法を実際に確認する。雑誌資料として電波新聞社の雑誌『マイコン』、映像資料としてNHK番組アーカイブスに当たる。

『マイコン』誌は1977年に創刊され、1995年に休刊した。主な内容は、ハードウェアのレビューや解析、ゲームのソースコード、コンピュータに関する報道・取材などである。当時は日本マイコンクラブが編集に協力していた。表紙・目次には「Micro COmputer Magazine」と表記されており、雑誌名がマイクロコンピュータに由来することが明示されている一方で、表紙のロゴ上には「パーソナル・コンピュータ時代の情報誌」という表現も見られる。雑誌名からしても「マイコン」が混同されている事例として見ることができるため、本研究の目的に最も適合する雑誌資料である。

『マイコン』について、国立国会図書館および京都府立大学図書館において所蔵が確認できた内、創刊からもっとも近い1977年10月号から1984年12月号まで、広告ページと読者投稿欄以外について、「マイコン」「マイコンコンピュータ」に言及のある記事を目視で調査した⁽⁹⁾。

NHK番組アーカイブスは、日本国内でも有数のテレビ番組アーカイブであり、『趣味講座 マイコン入門』をはじめとして、1980年代のパソコンユーザーを対象とした教養番組の所蔵が豊富である。NHKに限られるため偏りは避けられないものの、映像によって当時の状況を把握することは大きな意義がある。

調査はNHK番組アーカイブス学術利用トライアル2016年第1回に基づく。閲覧期間は2016年3月5日から7月11日までの間に18日間用意された。NHK大阪局にて、デジタル化された56本の番組を閲覧した。調査の対象とした番組について、論文で引用する番組については表-3にまとめた通りである。保存番組について「マイコン」「パソコン」をキーワードとして検索、放映年次を1984年12月頃までを目安として絞り込んだ。

調査期間の制約上、検索結果のすべてを閲覧できたわけではない。また閲覧についても、アナログテープからデジタル化を申請する必要のある番組と、即座に閲覧できる番組が存在した際には、後者を優先した。その結果、1984年12月以降に放映された番組も若干含まれている。また、番組構成表の利用は許可されていたが、調査の対象とした番組については構成表が存在しないものが多かったため、「マイコン」「マイクロコンピュータ」「マイコンコンピュータ」に言及のあった箇所について、筆者が逐次書き起こしを行った。また、アーカイブス利用条件としてプライバシーに配慮する必要があるため、発言者については、司会者・学術関係者・マスメディアにおいて著名であると判断できた人物のみ名前を表記した。

本研究には直接的な先行研究は存在しないため、直ちに包括的な結論を出せる状況ではなく、本研究がその基礎的な地盤固めを行うものである。範囲は限定されているが、これは本研究が語の出現を定量的に網羅する調査ではなく、語の用法を文脈から判断する定性的な調査だからである。そのため、雑誌資料・映像資料ともに一点に集中して掘り下げる必要がある。

本研究には直接的な先行研究は存在しないため、直ちに包括的な結論を出せる状況ではなく、本研究がその基礎的な地盤固めを行うものである。範囲は限定されているが、これは本研究が語の出現を定量的に網羅する調査ではなく、語の用法を文脈から判断する定性的な調査だからである。そのため、雑誌資料・映像資料ともに一点に集中して掘り下げる必要がある。

2. 雑誌に見るマイコンの用法

2-1 雑誌に見るマイコンの用法①組込型マイコンからPC型マイコンへ

1978年から1979年にかけて、パソコンと呼べるコンピュータが市場に出そろう中で、『マイコン』誌において言及されるマイコンは、組込型マイコンからPC型マイコンへと移り変わっていく。

1978年3月号では「マイコン活用の実際」という特集が組まれている。シャープの電子部品事業部の井内による解説記事では、マイコンという語はマイクロコンピュータの省略語として扱われ、その応用分野の説明は図-1にまとめられている⁽¹⁰⁾。この図はその当時においてマイコンの語で言及される技術がどのような形で人目についていたかをよく表している。特に、図の右上のような家電製品は組込型マイコンの応用例の象徴として扱われ、テープデッキ⁽¹¹⁾・ルームエアコン⁽¹²⁾・FMチューナー⁽¹³⁾といった家電製品の紹介記事も組まれている。特集をまとめるものとして「本格的普及期迎えるマイコン」の表題で記事が書かれているが、そこでは「このように普及してきたマイコンを趣味の対象としてとりくんでいるのがアマチュアのマイコン

表-3 本論文で言及する閲覧した番組

番組名	種別	放映年月
科学ドキュメント コンピューター大学 マイコン革命の旗手たち	総合	1981/11/30
理科教室 中学校三年生	教育	1982/3/8
サラリーマンライフ	教育	1982/3/14
趣味講座 マイコン入門 (毎週水曜日・全26回)	教育	1982/4/7~1982/9/29
ルポルタージュにつぼんマイコン頭脳買います	総合	1983/1/20
600こちら情報部	総合	1983/1/11
ジュニア大全科 (全5回)	教育	1984/3/5~9
マルチスコープ (全5回)	総合	1984/6/5~11
YOU	教育	1985/2/23

家」であると、組込型マイコンと読者を接続するような表現が見られる⁽¹⁴⁾。先の図-1にもまた同様に、中央より左下に趣味でマイコンに接する人間の姿が描かれている。

1979年1月号では「パーソナルコンピュータのすべて」と題して、その当時のパソコンの特集が組まれており、表-1で示した AppleII や MB-6880 の他、TK-80 にキーボード等を接続して一つのケースに収めた COMPO BS, シャープの MZ-80K, カナダのコモドル社の PET2001 など掲載されている。

この特集には、次のような前書きがある。

これまで多くの人々にとってコンピュータといえば、空調の施された耐震構造の建物の中に、整然と配置されたちょっと別世界の冷たさを感じさせる近より難しいものといったイメージがありました。[中略]そして現在食堂の食券販売機から地下鉄の行先案内放送まで知らないうちに、コンピュータが生活にはいりこむようになってきました。[中略]

そして、こういった生活の中に溶け込むマイコンに並んで、コンピュータとしての、素手のマイコンとも言えるパーソナルコンピュータが、各メーカーから次々と発表されるようになりました。⁽¹⁵⁾

「生活の中に溶け込むマイコン」の用法は組込型マイコンであると解釈できる。そして、パーソナルコンピュータも組込型マイコンに並ぶ存在であると説明されているが、まだ語として使い分けられている。

1981年12月号に掲載された当時の主要なパソコンの機

種についてユーザーの評価をまとめた特集においては、「マイコン」の用法として PC 型マイコンが完全に浸透しており、同じページでパソコンとマイコンが混用されている状態である⁽¹⁶⁾。

だが、1982年2月号における新製品パソコンの特集の前書きは、次のようなものである。

“マイコン”誕生から10年

10年一昔とよくいいますが、米国のインテル社が世界初のマイクロプロセッサ“4004”を発売したのは1971年11月。マイコンもようやくその歴史に一つの節目を迎え、今、新たな道を歩み始めたのです。[中略]このマイクロプロセッサは、またたく間にあらゆる産業分野に浸透していき、[中略]我々の日常生活にもいろいろ影響を及ぼし始めているのです。

マイクロプロセッサ応用製品のひとつである「パーソナル・コンピュータ」も昨今にわか一般社会に登場し、[中略]メーカーも家電製品なみの販売ルートの開拓に乗り出しています。[中略]

マイコンの10年前をふりかえり、そして、10年後に考えをめぐらすと、はたしてその姿はどうなっているか、楽しい夢が大きく広がってくるようです。⁽¹⁷⁾

この前文は、マイコンという語の指示対象が曖昧にならざるをえない状況をよく示している。1978年3月号の特集が示すように、家電製品の形で組込型マイコンの用法が広まっていった。その後にパソコンが台頭することになるが、基盤としている技術は共通している。「パーソナル・コンピ

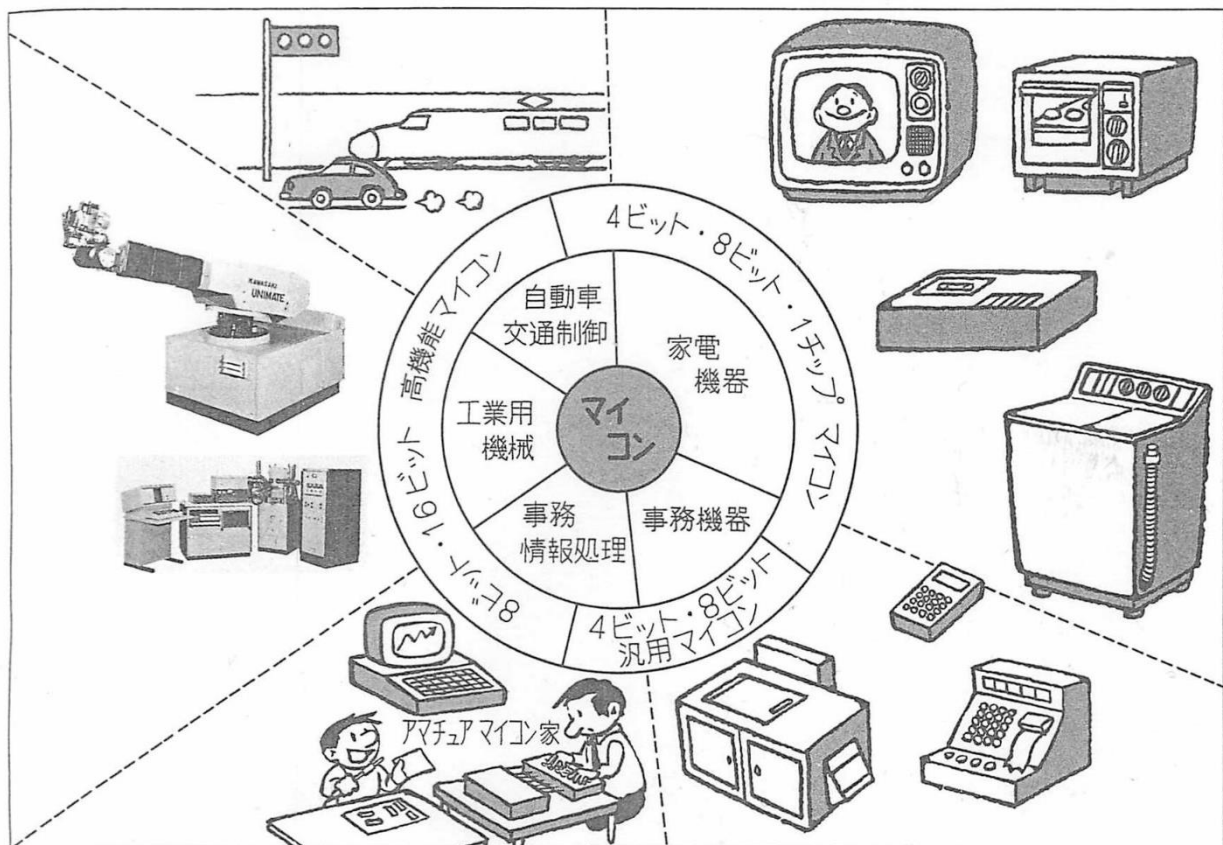


図-1 マイコンの応用分野

ュータ」を指示する PC 型マイコンの用法は、パソコンが「マイコン」と呼ばれるコンピュータの代表格として捉えられた結果なのである。

だが、この記事からは、組込型マイコンの文脈を読み取ることが可能である。「“マイコン”誕生から10年」という見出しはi4004を起点とした表現であるし、「マイコンの〔中略〕10年後に考えをめぐらすと、はたしてその姿はどうなっているか」という文は、マイクロコンピュータと呼ばれるコンピュータ全般がどのように発展していくかという一般論とも読み取れるからである。

2-2 雑誌に見るマイコンの用法②「マイコン」と「パソコン」の区別

『マイコン』誌において特集されるコンピュータが組み立て式のものからパソコンへ移行するに従い、PC型マイコンの用法が主要なものになっていくが、「マイコン」と「パソコン」に区別が見られる事例も存在する。

『マイコン』1984年1月号では「各社パソコン比較に見る'84の動向」という特集記事が生まれ、インタプリタ研究会⁽¹⁸⁾が2万円以上20万円未満のパソコンについて性能比較表を示して、マイコンやパソコンといった語の用法について、次のような解説をしている。

自動車に大型・中型・小型…といろいろあるのと同じく、コンピュータにも大型・中型・小型(ミニコン)・超小型(マイクロコンピュータ=マイコン)があります。

そして、自動車に〔中略〕用途に応じた呼び名がありますが、コンピュータでもパソコン(主に個人で使う)・オフコン(会社の事務用)などがあります。

ミニコン(？千万円もする)を個人で使うならそれもパソコンなのですが、普通はマイコンのうち炊飯器やVTR・エアコン等に入っているもの以外をパソコンと呼んでいます〔中略〕つまり、「私はパソコンが欲しい」と言っても、「私はマイコンが欲しい」と言っても同じことなんです。⁽¹⁹⁾

ここでは、組込型マイコンとパソコンの両方を含む上位の概念としてマイコンという語が使われている。ここで言うマイコンはコンピュータの規模を示す呼称であり、パソコンや組込型マイコンはコンピュータの用途に応じて呼び分けられたものである、という解釈である。

また、マイコンとパソコンの文脈が明確になりやすい話題として、オフィスオートメーション(OA)がある。情報処理学会歴史特別委員会によれば、OAとは企業事務にコンピュータや情報技術を導入して効率化を図ることで、1980年代に流行した概念である⁽²⁰⁾。

1982年2月号に掲載された松下電器のJR-100を紹介する記事⁽²¹⁾では、「マイコンは、ハードウェアの進歩と共にビジネスの使用にも耐えるようになり、ホビー市場からビジネス市場へ」移行したと書かれている。また「高性能パソコンの登場」「低価格マイコンの出現」と表現が分けられており、低価格マイコンとは「パソコンの入門機」「OAプー

ムに乗った新需要層を狙ったもの」であるとされている。つまり、安価な入門用コンピュータなのである。事実、話題となっているJR-100は本体価格を54800円と設定しており、これは日本電子工業振興協会が定義づけたというパソコンの価格帯10万円以上100万円以下⁽²¹⁾を下回るものである。

また、ラウンドシステム研究所⁽²²⁾の松井が『マイコン』誌で執筆している記事には、次のような表現が見られる。

「マイコン」がビジネスに使えると騒ぎ始めてからまだ日も浅いが、それが何時の間にか「パソコン」と名前を変えてOA機器の仲間入りをしているようである。⁽²³⁾

マイクロコンピュータを「マイコン」と呼ぶのは昔からのクセであります。CPUに「マイコン」を使う機械まで「マイコン」というに至り、区別がしにくいので「パソコン」という言葉ができたとするのはウソで、「パソコン」は仕事に使うものという線で玩具と区別しただけであつたかと思ひます。⁽²⁴⁾

これらの言明はもちろん松井一個人の感覚によるところが大きく、語の定義であると思ふことはできない。しかし、他の記事と合わせて評価すれば、マイコンはホビー用途であり、パソコンはビジネス用途であるという文脈が存在した可能性はある。

2-1で見た通り、マイコンという語はパソコンが普及する以前より存在していた。ゆえに、PC型マイコンの用法が確立してからも、パソコンが市場に出回る以前のマイコンのイメージ(組み立て式キットを趣味で用いること)を連想し、PC型マイコンはパソコンとは使用目的が異なる存在であるという見解が生まれたのである。

2-3 雑誌に見るマイコンの用法③マイコンコンピュータの略語である事例

『マイコン』誌においてマイコンという語の定義が問われる際にはマイクロコンピュータの解説が伴うことが多く、また1-3で述べた「Micro COmputer Magazine」の表記からしても、『マイコン』誌におけるマイコンは基本的に「マイクロコンピュータ」の略語であると考えられる。

「マイコンコンピュータ」との関連は、パソコンが市場に出回る以前に見られる。それが1978年11月号に掲載されている「MYオリジナルマイコンケース大集合」である。これはTK-80のような組み立て式のマイクロコンピュータに対して読者が自作したケースの写真を紹介する記事である。

〔引用者注：読者が投稿した自作ケースは〕どれもアイデアを生かし好みのデザインにしあげてあります。製作者自身が本当に楽しみながらケースを作られているという雰囲気がその作品から伝わってくるようです。

何でも完成品で入手できる時代に、これらのマイコンは本当にユーザーの心のこもった、「MY・コンピュータ」と言えるかも知れません。⁽²⁵⁾

この引用において、マイコンは「マイコンコンピュータ」の略語として理解するのが自然であろう。単に片仮名で表記

するのではなく、「私の」を意味する部分を英大文字にして視覚的に強調することで、ユーザーが独自のコンピュータ（個人型マイコン）を所有していることを示している。

個人型マイコンにおいて重要なことは、ユーザー自らが思い思いにケースを設計して製作しているというだけではなく、コンピュータが半田付けを必要とする組み立て式であった（完成品で入手できない）ことである。個人型マイコンは、個人がコンピュータを所有する形態の出発点に当たると考えられる。

しかし、『マイコン』誌においては、PC型マイコンの用法が主流になるにつれて、個人型マイコンの用法が見られなくなる。これはパソコンが完成品として生産・販売されたことを考えれば必然である。

このように自作ケースに関する記事は個人型マイコンの用法と親和性が高いと考えられ、またそれ以前の号で自作ケースの特集が組まれていたことは記事から読み取れているが、注釈9の通り1978年8月号から10月号については国会図書館における所蔵がなく確認できなかった。

2-4 まとめ：雑誌におけるマイコンの用法

以上、『現代用語の基礎知識』と照らし合わせ、組込型マイコン・PC型マイコン・個人型マイコンと分類した上で、1980年代前半を中心に『マイコン』誌におけるマイコンの用法を確認した。

コンピュータが生活に身近になった事例として家電製品に搭載された組込型マイコンの存在は分かりやすく、『マイコン』誌においてもその扱いは大きかった。

その後、パソコンの登場によって、PC型マイコンの用法が生まれ、「マイコン」で指示できる対象の代表的な存在となっていく。

しかし、PC型マイコンの用法が生まれた後も、組込型マイコンの用法は「マイコン」の語源であるとされ、「マイコン」という語自体はパソコンとは違う意味を持ちえるものと扱われた。また、パソコン出現以前の印象によって、PC型マイコンは趣味用途のパソコンであるといったような使用目的を示したものと解釈されることもあった。

いずれの解釈も、マイコンがマイクロコンピュータの略称であるという前提に基づいている。一方で、マイコンコンピュータの略称であるという用例は少なかったが、1980年以前に確認できた。そこでは組み立て式キットを自ら組み、自作のケースを作るという過程が重視され、個人型マイコンにはユーザーそれぞれのオリジナリティが存在すると考えられていた。このような特色はパソコンの普及によって薄れるため、『マイコン』の誌面においてはあまり見られなくなっていく。

3. テレビに見るマイコンの用法

3-1 テレビに見るマイコンの用法①PC型マイコンの事例

NHKの番組においてPC型マイコンの用例は顕著に確認できた。

特に象徴的なのは『趣味講座 マイコン入門』（1982）である⁽²⁶⁾。この番組はPC-8001⁽²⁷⁾によるBASIC入門講座だが、併売されたテキスト⁽²⁸⁾の本文でもPC-8001を指す語として「マイコン」が使われている。

『科学ドキュメント コンピューター大学 マイコン革命の旗手たち』（1981）⁽²⁹⁾における、電気通信大学の機械工学科研究室の取材映像では、学生・リポーターともにPC-8001を「マイコン」「マイクロコンピュータ」と呼んでいる。

また、パソコンゲーム業界のドキュメンタリー番組である『ルポルタージュにつぼん マイコン頭脳買います』（1983）⁽³⁰⁾において、ナレーションはパソコンを指示するのに「コンピュータ」「マイクロコンピュータ」「マイコン」という語を使用する。

成人男性向けの番組『サラリーマンライフ パソコンわたしの活用法』（1982）⁽³¹⁾においても、マイコンとパソコンが混在して使用されている。たとえば、番組のナレーションは「パソコン」という語を使用するが、リポーターや、インタビュー対象の一般人が使う言葉は「マイコン」であるというように、使い分けがあいまいであった。

3-2 テレビに見るマイコンの用法②組込型マイコンの事例

PC型マイコンと並んで、組込型マイコンの用例もよく見られた。

1979年には組込型マイコンを持つ炊飯器が松下電器産業から発売されており⁽³²⁾、現在も、炊飯器にマイコンという語が使われることがある⁽³³⁾。『ジュニア大百科』（1984）でも、ゲストの寺田浩詔⁽³⁴⁾が分解した炊飯器を見せ、組込型マイコンの役割について説明している⁽³⁵⁾。

『趣味講座 マイコン入門』（1982）では、BASIC講座とは別に、取材映像やゲストインタビューの時間が存在したが、そこで組込型マイコンを持つ家電製品が取り上げられた。第7回の「郵便料金はいくら」では、電子レンジが取り上げられる⁽³⁶⁾。組込型マイコンにより、カセットテープに記録されたプログラムで調理を制御できるものである。第8回の「積み上げたカン詰め」で紹介されるのは、電動ミシンである⁽³⁷⁾。組込型マイコンに記録された運針情報により、複雑な刺繍を自動的に行ってくれるものである。この番組においてはPC型マイコンと組込型マイコンの用法が混在していたことになる。

『マルチスコープ』（1984）の第2回「マイコン何でも活用」では、他の番組同様に家電製品も出てくるが、さらに「マイコンで管理された未来の住宅」が描かれる⁽³⁸⁾。たとえば、自然光を検知して開閉するブラインド、火災・ガス漏れの警報、侵入者があった場合の自動通報である。番組では、住宅の設備を組込型マイコンによって制御する（カーテンの開閉、家電製品の電源操作など）システムを自作した個人も取材を受けている。

組込型マイコンが住宅全体をオートメーション化するという構想は、2-1で見た『マイコン』1978年3月号の井

内の解説にも見られるため、組込型マイコンの発展形として一般に想定されていたものと考えられる。

3-3 テレビに見るマイコンの用法③マイクロコンピュータとマイコンコンピュータ

NHKの番組においては「マイクロコンピュータ」と「マイコンコンピュータ」の両方に言及が見られた。

『趣味講座 マイコン入門』(1982)の第1回⁽³⁹⁾において、講師の森口繁一⁽⁴⁰⁾は「マイコンというのは、マイクロコンピュータの略ですね。マイクロとは非常に小さい、コンピュータは電子計算機です」と言及している。

子供向けの番組『ジュニア大百科』(1984)では、ゲストの藤沢等⁽⁴¹⁾が、司会の浜村淳にマイコンとパソコンの区別を問われ、次のような応答をする。

(藤沢) 実際には、これはなかなか区別がつかなくて、学会で揉めてるんですね。一応、統一されたところでは、マイクロコンピュータ、まあ非常に小さいコンピュータという意味ですね。⁽⁴²⁾

このようにマイクロコンピュータの意味は原義通りに解説されるものの、やはりPC型マイコンの用法が一般的になっており、マイコンとパソコンは語として区別が難しい状況であったことが分かる。

また、マイコンコンピュータについては、『理科教室中学三年生』(1982)⁽⁴³⁾『600こちら情報部』(1983)『マルチスコープ』(1984)『YOU』(1985)が言及している。

子供向の情報番組である『600こちら情報部』(1983)で秋葉原電気街が取り上げられた際、リポーターであるジェリー・ソーレスはマイコンという語を次のように説明する。

(ソーレス) マイコン、マイコンなんて言ってますけれども、本当はマイクロコンピュータって、ちっちゃいコンピュータのことをマイコンって言うんですね。でも日本だとマイカーとか、マイホームなんて言うから、マイコン、私のコンピューターになるんでしょうけれども。⁽⁴⁴⁾

マイコンが「私の[マイ]コンピュータ」の略称であるという解釈について言及しているが、和製英語であるマイカー、マイホームと対比されており、「マイクロコンピュータ」の略称だという解釈が正しいものである、という説明になっている。

マイコンコンピュータの略称という解釈は間違いであるという説明は他にも見られる。子供向け番組『マルチスコープ』(1984)では、司会者である榎本了老と斉藤ゆう子が以下のようなやりとりをする。

(榎本) マイコンっていうのはさ、実は触るチャンスはあんまりないんだよね。あのね、パソコンとかそういうものは触れるけど、マイコンっていうのは機械の中に入っている一部分だから、なかなか触るチャンスはないと思うよ。マイコンっていったらね、英語で、ほら、マイ・コンピュータみたいに、そういう感じがあるでしょう。

(斉藤) あたし勘違いしてました。

(榎本) だから、その、機械のセットをイメージする人も多いかもしれないけれど、実は一部分で。

(斉藤) マイクロ・コンピュータなんですよ。

(榎本) そうなんですよ、小さいコンピュータだってことが、マイコンってことなんだよね。⁽³⁸⁾

榎本は組込型マイコンとパソコンは区別されると解説するが、これについては2-3でも同様の解釈を見た。また、マイコンコンピュータの略称という解釈は誤解であると説明されている。

成人男性向けの番組『YOU』(1985)においても、「マイコンとパソコンは違うのか」という問いに対して、応答として、古瀬幸広⁽⁴⁵⁾が司会の糸井重里と以下のような対話をする。

(古瀬) 言葉がちよっとあいまいになってますが、一応、マイコンっていう集合が大きい。その中にパソコンが入っている。マイコンと呼ばれるものはたくさんある。

(糸井) マイコンというのは私のコンピュータなんですか。

(古瀬) マイクロコンピュータの略です。

(糸井) わたしのと、パーソナルだから、一緒かなあと思った。

(古瀬) [中略] 最近は電気釜の中にも入ってます。

(糸井) カメラの中にも入っているのは、あれはマイコンなんですね。

(古瀬) マイコンですね。それを中心にすえて [中略] キーボードですとか、ディスプレイなんかをつけて、いろんな形で使えるようにしたのがパソコンと通称呼ばれているものですね。⁽⁴⁶⁾

古瀬の説明は、2-2で見た『マイコン』誌の説明に近い。「マイコンはパソコンの上位概念である」「マイコンというカテゴリの中に、パソコンや他のマイコン(組込型マイコン)が含まれている」というものである。

また、糸井の問いに注目したい。スタジオでのやり取りであるため台本に従った台詞であると考えられるが、糸井はマイコンを「私のコンピュータ」すなわち「マイコンコンピュータ」の略かと問うている。そして「わたしの」と「パーソナル」という語を並べているが、これは「マイコンコンピュータ」が「パーソナルコンピュータ」と同一視できるのではないか、という発言である。

このように、『YOU』の放映年の1985年の時点でも、マイコンコンピュータという語はマイクロコンピュータと共に出されるべき語であった。

『マイコン』誌の調査では、マイコンコンピュータの略称であると明示的に読み取れる事例は1978年のものであったが、NHKの番組において「マイコンコンピュータ」は1980年以降も出現している。これが2-3で見たような個人型マイコンの意味を持っているかどうかまでは分からないが、『600こちら情報部』(1983)でマイカー、マイホームといった和製英語と並べられている点は注目に値する。

3-4 まとめ：テレビにおけるマイコンの用法

1980年代前半に放映されたNHKの番組から、マイコンという語がどのように用いられていたかを見た。3-1で見た通り、映像資料中には一般人に対するインタビューも含まれているため、日常会話において「マイコン」がどのように用いられているかを確認することができた。結論として、「マイコン」は、マイクロコンピュータの略語およびパソコンの別称として、1980年代前半期に普及していた表現であるといえる。

組込型マイコンは、マイクロコンピュータが生活に身近な存在であると視聴者に示す上で、重要な存在であった。3-2で見た『趣味講座 マイコン入門』は、PC型マイコン(PC-8001)のBASIC修得を目的とした番組であるが、組込型マイコンを持つ製品を取材映像で紹介し、両者を「マイコン」の在り方として同列に扱っていた。これは、当時におけるマイコンの多面性をよく表している。

一方で「マイコンコンピュータ」の用法は、3章のみでは明白とはいえない。3-3では、マイコンコンピュータに言及する複数の番組があることを述べた。したがって、語の存在が、よく知られたものであることは確かであろう。しかし、2章とは異なり、『マイコン』とはマイコンコンピュータの略称ではなく、マイクロコンピュータの略称である」と明言されている。この理由については、マイコンコンピュータに着目して分析する4章において、改めて考察する。

4. マイコンコンピュータとしてのマイコン

「マイコン」がマイコンコンピュータの省略語であるという解釈は、『現代用語の基礎知識』に長らく掲載されていた他、雑誌資料においても映像資料においても出現している。2-4で見た通り、マイコンコンピュータには個人型マイコンの用法、「個人がそれぞれ独自のコンピュータを所有している」ことを強調する文脈があると考えられる。一方で、3-3で見た通り、NHKではマイコンコンピュータという語は間違いであるかのようにも扱われている。本章では「マイコンコンピュータ」の用法を追加の資料で分析していく。

4-1 安田寿明『マイコンコンピュータ入門』

安田寿明⁽⁴⁷⁾による『マイ・コンピュータ入門』(1977)は、元々『コンピュータピア』誌で1975年から1年間連載されていたコラムをまとめたもので、当時ベストセラーとなった⁽⁴⁸⁾。

安田は「マイ・コンピュータ、略してマイコン」について「正式にはマイクロ・コンピュータ」として、続く箇所以下のように説明する。

マイ・コンピュータとは〔中略〕ふたとおりの意味がある。ひとつは字義通り、いままでの大会社、官庁占有のコンピュータとちがって、個人所有のコンピュータという意味である。〔中略〕

第二は、個別の機械のためのコンピュータという意味である。〔中略；マイコンの登場により、個別の産業機械にコンピュータを組み込むことは容易になり〕製

めん機からみれば、そのコンピュータは、製めん機だけのためのコンピュータ、すなわちマイ・コンピュータなのである⁽⁴⁹⁾。

安田は「マイ・コンピュータ」という語に二つの意味を見出している。一つは前述の通り、個人がコンピュータを所有する（個人型マイコン）という意味である。もう一つは、個々の機械に組み込まれる制御用コンピュータ（組込型マイコン）を指しているが、安田はそこにも「マイ」という英語の意味を見出している。安田によれば、個別の機械も人間同様に「自分だけのコンピュータを持っている」と主張できることになる。

安田は「マイ・コンピュータ」という語で、マイクロコンピュータの特徴を端的に説明することを試みている。それまでのコンピュータは「ガラス張りの部屋に置かれ、ひとにぎりのエリート・ビジネスマンやエンジニアだけがそれを操作する」⁽⁵⁰⁾のものであった。アメリカでは1960年代後半から、日本では1970年代前半から、中古ミニコンピュータが個人の手に渡りやすくなる⁽⁵¹⁾。これらのユーザーが、マイクロコンピュータの登場と共に出現したDIYキットを買い求めるようになった。

したがって、安田の考える「マイコン」のユーザーとは、電気回路について知識を持ち、半田付けなどの作業に慣れた層である。たとえば、安田の作った「マイ・コンピュータ」は電子オルガンに組み込んだ自動演奏システムで、そのブロック図も掲載されている⁽⁵²⁾。これは2-3で見た、コンピュータに自作ケースを作る層とも重なる。

4-2 和製英語とマイコンコンピュータ

和製英語（和製外来語）とは、

単純借用された外来語を要素として、それを独自に組み合わせたり語形を変化させたりして「加工」された日本独自の外来語のこと⁽⁵³⁾

である。特に「マイコン」のような省略は発音を安定させるために行われやすい⁽⁵³⁾。また、語形や意味が、原語にない独自のものに变化している⁽⁵⁴⁾。

マイコンを「マイコンコンピュータ」の省略語と見なす場合、「マイ」のつく他の和製英語、「マイカー」「マイホーム」と同様ではないか、という指摘を3-3で見た。そこでは「マイコンコンピュータは『マイコン』の正しい解釈ではない」という主張も繰り返された。その理由は明らかでなかったが、「マイコンコンピュータ」は日本語独自の表現（和製英語）であって、英語としては正しくないという考え方に基づき、「マイカー」「マイホーム」と対比されたと考えられる。

マイクロソフト社のOSであるWindows95で外部記憶装置等にアクセスするメニューが「マイコンコンピュータ」と名付けられる等、必ずしもその表現自体が英語として間違っているわけではない。しかし、1980年代当時の「マイコンコンピュータ」には、和製英語として英語にない意味が付加されていたと考えられる。

「マイ」という語が含まれる和製英語について、スタンロー⁽⁵⁵⁾は以下のような見解を示している⁽⁵⁶⁾。

英語における一人称所有格であるこの外来語は現代日本人の新しい世界観を如実に表現している。つまり集団の成員としての責任という伝統的価値観と、個人の私的利益・目的を尊ぶ価値観が互角に肩を並べるようになったことを表している。「マイ・ホーム」「マイ・ペース」「マイ・カー族」というのがその例である。

スタンローは「マイ」という言葉によって、個人(的なもの)が婉曲的に表現されていると考える。実際、和製英語は「ことばの微妙なニュアンスを表す選択肢を増やし、婉曲的な表現に用いられる場合があるとされる⁽⁵⁷⁾。「コンピュータ」は「電子計算機(電算機)」という漢字表記を持つ⁽⁵⁸⁾が、調査年代当時において既に「コンピュータ」の方が一般的に用いられていた。これは婉曲表現であるというより、漢字表記よりもカナ表記の方が簡略であったからと考えられる。

『マイコン』誌が「MY・コンピュータ」とアルファベットで強調して表記したように、「マイコンピュータ」には、コンピュータが自分だけのものであると強調する意図が存在している。この点は「マイホーム」「マイカー」といった和製英語と共通すると言える。

4-3 まとめ:マイコンピュータとしてのマイコン

本章において、2章および3章だけでは不明瞭であった「マイコンピュータ」の意味を明らかにした。

「マイコンピュータ」は「マイクロコンピュータの出現によって、自分だけのコンピュータが所持できる」という状況を表していた。このため、自分で半田付けしてコンピュータを組み立てるような人間が「マイコンピュータ」のユーザー層として想定された。

4-1において、安田は「機械が自身を制御するコンピュータを単独で持つこと」を示す語としても解釈していた。このような解釈は、「マイコン」が「マイクロコンピュータ」ではなく「マイコンピュータ」の省略語であるという主張を強めるために為されていると考えられる。

マイコンピュータは和製英語であるから、マスメディアが「英語として正しい表現でない」と指摘することもあった。マイコンピュータという表現に、個人に使われることを強調する意図があるのは、マイカー、マイホームといった他の和製英語との共通点である。

5. 「マイコン」の多面性

5-1 マイコンの語源と普及

これまで書籍・雑誌・映像においてマイコンの用法を見てきた。語の使用について厳密な時系列を完成させることはできないが、マイコンは英語の「マイクロコンピュータ」の省略語と考えるのが自然である。そして、「マイコン」の「マイ」が「マイホーム」「マイカー」と同様に「私の」であるという連想が、和製英語としての「マイコンピュータ」を生んだ可能性は高い。

もっと言うならば、以下のような流れが想定できる。「マイクロコンピュータ」という英語が入ってきた時、日本語

として発音しやすくするために「マイコン」という省略がなされた。「マイコン」は既存の「マイ」という音を持つ和製英語を連想するものであったから、「マイコン」を取り巻く状況(個人でコンピュータが所有可能)を一言で説明する新たな和製英語「マイコンピュータ」が生まれ、「マイコン」と関連付けられるようになった。

「マイコン」が何の略称であれ、その語が一般的に広まるきっかけを作ったのは家電製品である。2-1および3-2で見た限りでも、テーブデッキやFMチューナーといったAV機器、ルームエアコンのような空調機器、炊飯器・電子レンジのような調理器具から電動ミシンまで、「マイコン」を持つ家電製品は様々な分野に及んだ。「マイコン」が我々の生活を変えるものということは、家電製品を通じて理解されただろう。これは組込型マイコンの用法が一番早く一般の人々にとって馴染み深いものになったであろうことも意味する。

そして、組立不要で使えるパソコンの出現は、ホビーからオフィスまで、多様な目的に対応するものとして、「マイコン」に触れる人間を増やした。パソコンはソフトウェアさえあれば使うことができるので、ビデオゲーム機にも日本語ワードプロセッサにもなる。このような柔軟性を持つパソコンは「マイコン」技術の代表格として解釈され、一時期「マイコン」と言えばそれはパソコンを意味するほどの影響力を持った。

5-2 マイコンから失われていく意味①PC型マイコン

今日「マイコン」という語を使用する際には、マイクロコンピュータを意味し、パソコンの別称やマイコンピュータの略称を意味しない。つまり組込型マイコンの用法しか定着しておらず、PC型マイコンや個人型マイコンの用法は消失している。このような言葉の意味の消失が「いつ」起きたかを特定することは極めて困難である。問えるとすれば「なぜ」である。

PC型マイコンの用法が消失する原因そのものは明らかである。それは「パソコン」をわざわざ「マイコン」と呼ばずにそのまま「パソコン」と呼べばそれで済むという了解が広まることである。それは本稿で見た1980年代前半期に既に進行している。たとえば、2-2で見た『マイコン』誌1984年1月号の説明や、3-3で見た1985年放映の『YOU』などは「マイコン」と「パソコン」は異なる言葉であると解説を行っている。

両者に共通するのは、「パソコン」は「マイコン」と呼ばれる存在ではあるものの、「マイコン」の方がより指示対象が広い(組込型マイコンの意味も持つ)語であるという説明である。本稿で取り上げた資料のいずれもが、複数の人間によって表現が検討される機会を持ち得ているもの、つまり編集された情報である。編集の過程で表現の使い分けが意識されてゆけば、メディアは「パソコン」「マイコン」を区別し、「パソコン」を「マイコン」に言い換えることもなくなっていく。それらを見る読者・視聴者の方も影響を受けることになるだろう。

5-3 マイコンから失われていく意味②個人型マイコン

個人型マイコンが「なぜ」使われなくなったのかは、個人型マイコンが指示する対象の変化による。個人型マイコンとは、2-3や4-1で触れたような、使用者の目的に応じて組み立てられたコンピュータを第一に意味する。

しかし、パソコンの普及によって、コンピュータを手作りすることは必ずしも必要ではなくなり、そのようなオリジナリティは失われていく。和製英語としての「マイコンコンピュータ」はその後も残り、「パーソナルコンピュータ」と同一視する解釈もあった。たとえば1-2で見た『現代用語の基礎知識』1985年から1987年の記述や、3-3で見た1985年放映の『YOU』である。だが、そこにおいて個人型マイコンの意味内容は問われていない。

しかし、コンピュータを一から組み立てるのではなくとも、ユーザーがパソコンに愛着を持って接しているという状況を表すのに「マイコンコンピュータ」を使う余地は残されていた。このような「マイコンコンピュータ」の和製英語的な用法について、本稿で資料とした『マイコン』誌が1990年代に文章を残している。

『マイコン』誌は、1992年に『My Computer Magazine』に改名するが、そこで誌名を改めることについて、次のような説明を与えている。

創刊時、パーソナルコンピュータとほぼ同義語であった「マイコン」の語感はパーソナルコンピュータの独自の発展とともに本来のマイクロコンピュータのイメージに帰っていきました。

本誌はそれに対応して2年前から、題字の下のキャッチフレーズを、My Computer Magazineに変え、タイトルである「マイコン」を「マイ・コンピュータマガジン」の略称であるという位置づけ[原文ママ]をし、誌面でも、マイ(私の)コンピュータという言葉を使用してまいりました。⁽⁵⁹⁾

PC型マイコンの解釈は短期間で強い影響を持つように

なったが、「パソコン」と「マイコン」の違いは組込型マイコンの存在で説明された。組込型マイコンの用法は、1980年より以前から、家電製品によって、コンピュータに強い関心を抱かない層にも広まっていた。したがって、「パソコン」をわざわざ「マイコン」と呼ばなくなったとすれば、組込型マイコンの用法しか残らなくなる。

このような状況下で、パソコン専門誌となっていた『マイコン』誌が創刊当時からの誌名にこだわるとすれば、「マイコンはマイクロコンピュータの省略語」という解釈を変えるしかなかったのである。そこで持ち出されたのが「マイコンはマイコンコンピュータの省略語」という解釈であった。パソコンは組込型マイコンの意味では「マイコン」ではないが、個人型マイコンの意味では「マイコン」たり得る。

もっとも、これは「パソコン」と「マイコン」に関連付けを必要とした『マイコン』誌編集部が生み出したものである。個人型マイコンの用法は組み立て式キットでコンピュータに触れることを前提としているが、パソコンの台頭によって「マイコンの『マイ』は『私の』を意味する」という表面的な解釈になり、「マイコンコンピュータ」という言葉自体は『マイコン』誌の改名にも影響を与える程度には残ったと考えられる。

本稿においては1990年代以降については詳述しないが、4-2でも触れたWindows95の「マイコンコンピュータ」の存在については再度言及しておきたい。Windows95は世界的に売れたOSであり、日本も例外ではない⁽⁶⁰⁾。和製英語としての「マイコンコンピュータ」がすたれた要因の一つであるとは十分に考えられる。

6. 結論

英語のmicrocomputerを省略することで生まれた日本語「マイコン」は、1980年代においては、複数の意味を持っていた。その原因は、1970年代半ば頃のマイコンブーム(TK-80などの組み立て式キットの流行)から1980年前

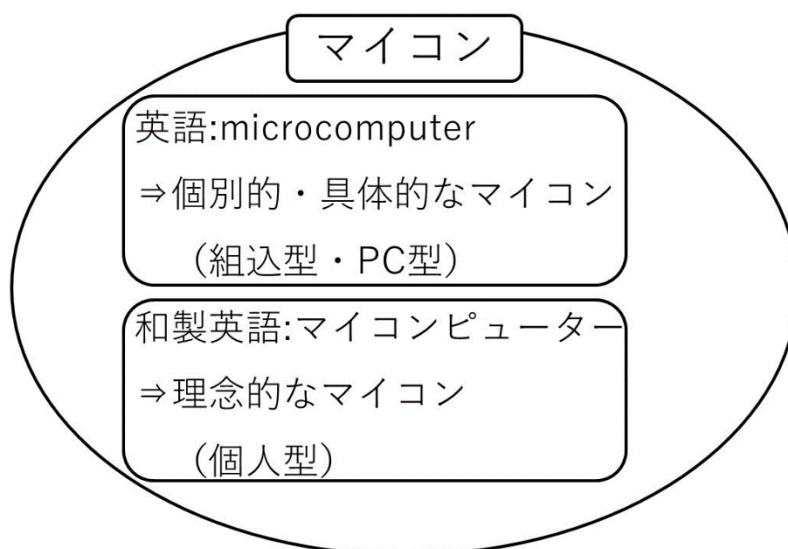


図-2 マイコンの用法の分類

後のパソコンの出現によるものである。

その用法は大きく分けて二つに分かれ、図-2のように分類できる。

- 英語 **microcomputer** の省略語として用いられている場合
- 和製英語マイコンピュータの省略語として用いられている場合

前者の「マイコン」は、具体的・個別的に何かを指示する用法である。本稿で、組込型マイコン・PC型マイコンと名付けた用法がこれに当てはまる。特に、家電製品は、マイクロコンピュータを基盤とする新しい技術を語る上で、分かりやすく重要な具体例であった。組込型マイコンとPC型マイコンは、製品として用途が異なるが、マイクロコンピュータ技術に基づいた存在である。ゆえに両者は、同じ「マイコン」であるとして、包括的に語られた。

後者の「マイコン」＝「マイコンピュータ」は、マイクロコンピュータ技術と個人の結びつきを表している。マイクロコンピュータによって、個人でもコンピュータが所有できるようになり、個人が目的に応じてコンピュータを自作できるようになった。パソコンの普及により、個人が独自のコンピュータを作るという視点は抜け落ちていくが、マイホーム・マイカーのような和製英語と同様に「自分だけのコンピュータを所持している」ことを強調する文脈において「マイコン」は用いられた。

「マイコン」とは、コンピュータが日常的なものとして浸透する過程の最初期において、偶発的に生まれた言葉である。以上のような多義性は、マイクロコンピュータ技術によって、個人とコンピュータの関係が様々な場面でより密接になっていった当時の状況を示している。一般社会とコンピュータの関わりについては、このような非専門的な領域における語の存在がより良く当時を説明するものと考えられる。

注および引用文献

- (1) 情報処理学会歴史特別委員会(編):日本のコンピュータ史, オーム社, 2010, 23頁
- (2) 情報処理学会歴史特別委員会(編):日本のコンピュータ史, オーム社, 2010, 94-95頁
- (3) 文部省:マイクロコンピュータの教育利用に関する調査について, 1983年6月10日発出
<http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19830610001/t19830610001.html>
最終閲覧日 2016年9月30日
- (4) 著者不明:マイコン, 現代用語の基礎知識 2000, 2000, 自由国民社, 1362頁
- (5) 増田米二:マイ・コン時代, 現代用語の基礎知識 1977, 1977, 自由国民社, 47頁
- (6) 著者不明:マイ・コン, 現代用語の基礎知識 1978, 1978, 自由国民社, 730頁

- (7) 著者不明:マイ・コン, 現代用語の基礎知識 1979, 1979, 自由国民社, 784頁
- (8) 著者不明:マイ・コン, 現代用語の基礎知識 1985, 1985, 自由国民社, 959頁
- (9) 1977年8月号, 1978年8月号から10月号, 1979年4月号は国立国会図書館に所蔵されていなかった。
- (10) 井内優:「マイコン」とは何か 広がるマイコン応用製品, マイコン, 電波新聞社, 1978年3月号, 1978, 14-20頁
- (11) 大林國彦:オプトニカ・テーブデッキ RT-3150, マイコン, 電波新聞社, 1978年3月号, 1978, 21-23頁
- (12) 佐野強, 後藤英夫:マイコン内蔵ルームエアコン東芝 RAS185SKV, 225SKV, マイコン, 電波新聞社, 1978年3月号, 1978, 24-25頁
- (13) 浅利榮厚:テクニクス FM ステレオチューナ 38 シリーズ, マイコン, 電波新聞社, 1978年3月号, 1978, 26-27頁
- (14) 著者不明:本格的普及期迎えるマイコン, マイコン, 電波新聞社, 1978年3月号, 1978, 29頁
- (15) 著者不明:特集パーソナルコンピュータのすべて, マイコン, 電波新聞社, 1979年1月号, 1979, 22頁
- (16) 著者不明:特集:目的別パソコン選びのキーポイント, マイコン, 電波新聞社, 1981年12月号, 1981, 125-137頁
- (17) 著者不明:特集:各社最新パソコンの性能を探る, マイコン, 電波新聞社, 1982年2月号, 1982, 121頁.
- (18) マイコンの複数の編集者が記事を共同執筆する上での, 便宜上の組織名と考えられる。
- (19) インタプリタ研究会:低価格パソコン購入徹底ガイド, マイコン, 電波新聞社, 1984年1月号, 1984, 296頁
- (20) 情報処理学会歴史特別委員会(編):日本のコンピュータ史, オーム社, 2010, 38頁
- (21) 著者不明:特集:各社最新パソコンの性能を探る, マイコン, 電波新聞社, 1982年2月号, 1982, 133頁.
- (22) コンピュータシステム開発・コンサルタントを目的として1977年に設立され, 企業向け会計プログラムを継続的に開発。記事の執筆者の松井雄之亮は創業者である。下記サイトを参考にした。
(株)ラウンドシステム研究所・会社概要
<<http://www.roundsystem.co.jp/gaiyo.htm>>
2016年9月30日最終閲覧
- (23) 松井雄之亮:マイコンビジネスソフトの問題点, マイコン, 電波新聞社, 1982年8月号, 1982, 328頁
- (24) 松井雄之亮:マイコン界展望'84, マイコン, 電波新聞社, 1984年1月号, 1984, 510頁
- (25) 著者不明:特別企画 マイコンケース自作のすすめ MY オリジナルマイコンケース大集合, マイコン, 電波新聞社, 1978年11月号, 1978, 50頁
- (26) その後, 1983年には難度を上げたプログラミング講座である「たのしいマイコン」, 1986年にはパソコン通信を扱った「マイコン通信入門」がそれぞれ放映されている。
- (27) 番組中では機種名は伏せられている。

- (28) 日本放送協会：NHK 趣味講座マイコン入門 57 年度前期，日本放送出版協会，1982
- (29) NHK 総合：科学ドキュメント コンピューター大学 マイコン革命の旗手たち，1981 年 11 月 30 日放映
- (30) NHK 総合：ルポルタージュにつぼん マイコン頭脳買います，1983 年 1 月 20 日放映
- (31) NHK 教育：サラリーマンライフ パソコン わたしの活用法，1982 年 3 月 14 日放映
- (32) パナソニック テレビと家電の歴史 1970 年代
<<http://panasonic.jp/viera/history/1970.html>>
2016 年 9 月 30 日最終閲覧
- (33) 象印・製品情報・マイコン炊飯ジャー
<http://www.zojirushi.co.jp/syohin/ricecooker/index_type03.html>
2016 年 9 月 30 日最終閲覧
- (34) 当時，大阪大学助教授。情報通信システムを専門とする。
- (35) NHK 教育：ジュニア大全科 これがマイコンだ！(3)と1がすべてを語る，1984 年 3 月 7 日放映。
- (36) NHK 教育：趣味講座 マイコン入門 第七回 郵便料金はいくら，1982 年 5 月 19 日放映。
- (37) NHK 教育：趣味講座 マイコン入門 第八回 積み上げたカン詰め，1982 年 5 月 26 日放映。
- (38) NHK 総合：マルチスコープ マイコン何でも活用，1984 年 6 月 12 日放映。
- (39) NHK 教育：趣味講座 マイコン入門 第一回 マイコンとの対面，1982 年 4 月 7 日放映。
- (40) 当時，東京大学名誉教授。アセンブリ言語 SIP の開発，プログラミング言語 ALGOL・FORTRAN の普及教育に携わった。1969 年から 76 年にかけて NHK 教育で放映された『コンピューター講座』にも講師として出演した。
- (41) 当時，関西大学助教授。番組中では，藤沢が主催していたマイコンクラブ「コムコム」の紹介もされている。
- (42) NHK 教育：ジュニア大全科 コレがマイコンだ！(1)コンピューター連結作戦，1984 年 3 月 5 日放映。
- (43) NHK 教育：理科教室中学校三年生 科学の話題 2 マイコン，1982 年 3 月 8 日放映。
- (44) NHK 総合：600 こちら情報部 潜入！マイコン基地 ザ・秋葉原，1983 年 1 月 11 日放映。
- (45) 当時，東京大学在学中。コンピュータに関する文筆活動を行っていた。
- (46) NHK 教育：YOU パソコンなんか怖くない 青春プレイバック 小松方正，1985 年 2 月 23 日放映。
- (47) 当時，東京電機大学助教授。NHK の番組である『サラリーマンライフ パソコン わたしの活用法』(1982)，『ブラウン管新時代』(1979) の司会を務めた。
- (48) 富田倫生：パソコン創世記，株式会社ボージャー，1995，591 頁
- (49) 安田寿明：マイ・コンピュータ入門，講談社，1977，28-29 頁
- (50) 安田寿明：マイ・コンピュータ入門，講談社，1977，32 頁
- (51) 安田寿明：マイ・コンピュータ入門，講談社，1977，80-87 頁
- (52) 安田寿明：マイ・コンピュータ入門，講談社，1977，136 頁
- (53) 陣内正敬：外来語の社会言語学，世界思想社，2007，144 頁
- (54) 陣内正敬：外来語の社会言語学，世界思想社，2007，39-41 頁
- (55) 日本をフィールドとする言語・認知人類学者で，引用(56)については，ジェームズ・スタンロー，『和製英語と日本人』，新泉社，2010，16-53 頁に改稿版が存在する。
- (56) ジェームズ・スタンロー，速水均（編訳）：和製英語は馬鹿にできない，知識，彩文社，1990，120 頁
- (57) 沖森卓也，阿久津智（編）：ことばの借用，朝倉書店，2015，68 頁
- (58) 大島直廣：コンピュータという言葉の歴史，オフィス・オートメーション，日本情報経営学会，20 巻 2 号，1999，54-55 頁
- (59) 著者不明：月刊マイコン 15 周年誌面刷新のお知らせ，マイコン，電波新聞社，1992 年 8 月号，1992，60 頁
- (60) 日経パソコン編集（編）：日経パソコン創刊 30 周年特別編集 パーソナルコンピューティングの 30 年，日経 BP 社，2013，90 頁